



原著 自閉スペクトラム症のある児童生徒における、行い手の意図と相反する結果が生じる条件での道徳的判断 : 判断する視点による影響の検討

著者	岡村 恵里子, 岡崎 慎治, 大六 一志
著者別名	OKAMURA Eriko, OKAZAKI Shinji, DAIROKU Hitoshi
雑誌名	障害科学研究
巻	42
ページ	17-27
発行年	2018-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151812

原 著

自閉スペクトラム症のある児童生徒における、
 行い手の意図と相反する結果が生じる条件での道徳的判断
 — 判断する視点による影響の検討 —

岡村 恵里子*・岡崎 慎治**・大六 一志

本研究では8～18歳の自閉スペクトラム症（ASD）のある児童生徒16名と定型発達（TD）児童生徒37名を対象に、第三者視点および行為の受け手視点、行い手視点からの道徳的判断を実験的に検討した。道徳的判断では、ポジティブまたはネガティブな行い手の意図と行為の結果を変数とした物語を使用した。その結果、ASD児童生徒はTD児童生徒と同様に、意図と結果の両方を考慮し、視点に応じて判断を変えていた。ただし、意図と相反するネガティブな結果が生じる条件では、特に受け手視点において、ASD児童生徒はポジティブな意図よりもネガティブな結果を重視して判断をしていた。

キー・ワード：自閉スペクトラム症 道徳的判断 行い手の意図 行為の結果 判断する視点

I. 問題と目的

自閉スペクトラム症（以下ASD）児者の社会的な困難を説明する仮説の一つに、他者に心的状態を帰属することの困難を原因とする心の理論（theory of mind；以下ToM）障害がある。ASD児者は、ToM課題の通過が遅れることが知られている（Baron-Cohen, 1995）。しかし、知的な遅れのないASD者の中にはToM課題に通過する人がいること（Happé, 1994）や、視線の動きなどの潜在的指標ではASD成人でも他者の心の読み取りに困難さが残ること（Senju, Southgate, White, & Frith, 2009）から、高機能ASD児者の社会的な困難は、直感的に他者の心的状態を読み取ることの難しさにあり、補償機能によってToMを獲得していると考えられている（別府, 2007；Frith, 2004）。

近年、他者の心的状態の理解を測る手段として、意図を変数とした道徳的判断課題が用いられている（Moran, Young, Saxe, Lee, O’young, Mavros, & Gabrieli, 2011）。行い手の意図と行為の結果を変数とした道徳的判断において、ASD児者は、定型発達（以下TD）児者と同様に、意図と結果の両方を考慮して判断を行うことが示されている（Grant, Boucher, Riggs, & Grayson, 2005；Moran et al., 2011）。

一方で、行い手の意図に相反する結果が生じる条件では、意図をどの程度重視するかについて、ASD児者とTD児者との違いが示唆されている。例えば、Moran et al. (2011) では、意図と相反する結果が生じる条件の一つである attempted harm（ネガティブな結果を意図して行為したがネガティブな結果が起らない）と accidental harm（ネガティブな結果を意図せずに行うしたがネガティブな結果が起る）の条件において、悪さの程度を判断するように求め

* 守谷市こども療育教室

** 筑波大学人間系

た。その結果、TD成人はaccidental harmよりもattempted harmを悪いと判断したが、ASD成人はどちらも悪さに違いがないと判断していた。Buon, Dupoux, Jacob, Chaste, Leboyer, and Zalla (2013)の研究でも、ASD成人がTD成人よりも、ネガティブな意図がなくネガティブな結果が生じる条件を悪く判断することが示されている。

小学校高学年のASD児童に対して行い手の意図と相反する結果が生じる条件での判断を調べた研究もある。Fadda, Parisi, Ferretti, Saba, Foscoliano, Salvago, and Doneddu (2016)では、ネガティブな意図があってネガティブな結果として小さな被害が生じた条件と、ポジティブな意図があって大きな被害が生じた条件の間で、悪い方を判断するように求めた。すると、ASD児童はTD児童よりも、被害の大きな条件の方を悪いと判断することや、ネガティブな結果が起きたので両条件とも悪いと判断することが多かった。

Moran et al. (2011) や Buon et al. (2013)、Fadda et al. (2016)の研究から、意図に相反する結果が生じる場面において、ASD児者は意図よりも結果を重視する判断を行うと考えられる。

上記のFadda et al. (2016)では、意図に相反する結果が生じる2条件から、悪い方を二者択一で判断する手続きを採用している。二者択一を求める手続きでは、相対的に悪いと判断される条件を明らかにすることはできるが、どちらの条件にどのくらいの善悪の程度を判断したのかは検討できない。それに対して、Moran et al. (2011)とBuon et al. (2013)は、各条件の善悪の程度を判断するために、「どのくらい悪いか」と尋ねる手続きを採用している。しかし、これらの研究はASD成人を対象としており、ASD児童生徒については検討されていない。そこで、本研究では、意図と結果が相反する条件において、ASD児童生徒が各条件にどの程度の善悪を判断するのか検討することにした。

ところで、日常生活で道徳的判断を行う際に、判断を行う主体の視点によって判断は変化する。Constanzo, Coie, and Grumet (1973)では、

意図と結果を変数とした道徳的判断において、5～11歳のTD幼児児童は、行為の行い手視点から受け手の視点を想像して判断した場合は結果を重視し、行為の行い手自身の視点を想像して判断した場合は意図を重視していた。

視点に応じて判断を変えるには、視点ごとに異なる文脈や感情などの情報を考慮し、他者の心的状態を表象する必要があると考えられる。ASD児者がToMを補償的に獲得するという仮説では、ASD児者とTD児者は他者の心的状態の理解についての発達が異なると想定されている(別府, 2007; Frith, 2004)。そして、意図に関わる道徳的判断において、ASD児者とTD児者の判断の違いがみられること(Buon et al., 2013; Moran et al., 2011; Fadda et al., 2016)を考慮すると、ASD児者は、複数の視点を表象し、それぞれの視点の違いを判断に反映しない可能性が考えられる。そこで、本研究では、第三者と受け手、行い手という3つの視点を採用し、ASD児童生徒の道徳的判断に、判断する視点の違いが反映されるか検討することにした。

TD児が意図を重視した道徳的判断を安定的に行うようになるのが小学校高学年頃からであること(鈴木, 2013)から、ASD児童生徒の意図に関わる道徳的判断の特徴を明らかにするためには、意図理解が明確に判断の中に現れる児童期後期以降の児童生徒を対象とする必要がある。そして、意図に関わる道徳的判断について、ASD児童生徒とTD児童生徒との共通点および相違点を検討することで、ASD児童生徒の日常生活での社会的な困難の原因を推測し、支援方法を考える一助となることが期待できる。

そこで、本研究では児童期後期から青年期のASDおよびTD児童生徒を対象として、行い手の意図と行為の結果との一貫性を変数とした道徳的判断課題を用い、複数の視点から判断を実験的に検討した。本研究の目的は、①先行研究と同様に、ASD児童生徒が意図と結果の両方を考慮して道徳的判断を行うか、②ASD児童生徒は判断する視点に応じて異なる判断を行うか、③意図に相反する結果が生じる条件におい

て、視点の違いに関係なく、ASD 児童生徒は意図よりも結果を重視する判断を行うのか、の3点を明らかにすることである。

II. 方法

1. 研究協力者

ASDの診断を受けている8～18歳の児童生徒16名(平均13.68歳, $SD=2.79$ 歳, 男:女=14:2名)と年齢を統制したTD児童生徒37名(平均13.69歳, $SD=2.42$ 歳, 男:女=29:8名)を対象にした。Mann-WhitneyのU検定を用いて両群の年齢を比較したところ、有意差はなかった($U=302$, $z=0.11$, *n.s.*)。ASD群のWISC-IVにおける平均FSIQは104.4 ($SD=20.0$)、平均VCIは104.5 ($SD=20.5$)であり、ASD群のうち1名はFSIQとVCIが70以上、他全員が80以上であった。TD群については、保護者または学校教員に学習や行動面に問題がないことを確認した。

なお、実験を実施する際には、本人および保護者の参加の意思を確認したうえで、保護者または所属する学校からの同意を得た。本研究は筑波大学人間系倫理委員会の承認(承認番号:筑28-44)を受けた。

2. 課題

Moran et al. (2011) と Costanzo et al. (1973) を参考に、ポジティブ(P)またはネガティブ(N)な意図(I)と結果(O)を割り当てた4条件(意図と結果が一致する2条件:PI×PO条件とNI×NO条件, 意図に相反する結果が生じる2条件:PI×NO条件NI×PO条件)を設定した。

各物語の文章をTable 1に示した。課題として、2種類の物語(お水課題とカブトムシ課題)を作成した。物語は児童を主人公とし、各条件のポジティブまたはネガティブな意図の文脈に即した行為になるように文章表現を配慮した。各条件の前に、物語の状況を説明する前文を付けた。前文は各物語の条件間で同一のものとした。また、物語の状況と行為の結果を表現した2枚のイラストも作成した。

課題は、各条件に1枚ずつ、文章とイラスト

が載ったA4サイズのプリントとして構成した。物語の意図と結果情報の読み飛ばしを防ぐため、意図の部分は太字で下線を引き、結果には下線を引いて強調した。そして、文章の漢字にはすべてふり仮名をつけた。

3. 手続き

実験は個室において、一対一の個別面接で実施した。研究協力者には各条件を一つずつ提示して判断を求めた。すべての協力者に全8条件(物語2種類×条件4つ)を実施した。

各条件の実施手順としては、研究協力者に1条件分の課題のプリントを提示し、文章を黙読するか、実施者が読み上げるか選択するように求めた。そして、物語が読み終わったことを確認してから、意図と結果情報の読解を調べる内容確認質問と、行為の善悪の判断を求める道徳的判断質問を行った。なお、質問に対しては口頭で回答するように求めた。内容確認質問と道徳的判断質問は、口頭での質問を行うとともに、質問項目を印刷したプリントも合わせて提示した。

内容確認質問に誤答した場合は、実施者が物語の登場人物を確認し、物語の中で登場人物が行った行為と行い手の意図、行為の結果の部分の記述を読み上げ、再度同じ質問をする手続きを行った。そして、回答を通して設定通りの読解が確認されてから、道徳的判断質問を行った。

道徳的判断では、行為を見ていた第三者、行為の受け手、行い手の3つの視点を想像して判断するように求めた。各視点の道徳的判断質問の例を以下に示す¹⁾。

①第三者視点:「あなたからみて(行い手名)がしたことは?」

②受け手視点:「(受け手名)からみて、(行い手名)のしたことは?」

③行い手視点:「(行い手名)からみて自分のしたことは?」

受け手視点の道徳的判断については、受け手が行い手の意図を知っているか否かによって判断が変わると考えられた。そこで、受け手が行い手の意図を知っているという設定に統一する

Table 1 全課題の各条件および前文の物語例

	お水課題	カプトムシ課題
ポジティブな意図 (PI)	ユウは、おばさんにおもてなしをしようと思い、新しいお水を出しました。	ナツコは、ケイを喜ばせたいと思い、新品のかごにカプトムシを入れてケイにプレゼントしました。
ネガティブな意図 (NI)	ユウは、おばさんを困らせようと思いい、古くなったお水を出しました。	ナツコは、ケイにいたずらをしようと思いい、使い古したかごにカプトムシを入れてケイにプレゼントしました。
ポジティブな結果 (PO)	お水はきれいでき、においもしませんでした。お水を飲んだ後で、おばさんは引き続き、お話をしました。	かごのふたはしっかりしまっていたので、カプトムシはずっと逃げず、ケイは毎日ながめることができました。
ネガティブな結果 (NO)	お水は少しにごって、変なおいがありました。お水を飲んだ後で、おばさんはお話をされていて、お腹がいたくなりました。	かごのふたは壊れてゆるんでいたのので、カプトムシはすぐに逃げて、いなくなっていました。
前文	親せきのおしゃべり好きのおばさんが、ユウの家に遊びに来ました。約束の時間より早かったので、お母さんは、おばさんに出すお菓子を買いに行っていて、家にはいませんでした。	ナツコは、友達のかごの誕生日会に行きます。ナツコは、ケイへの誕生日プレゼントとして、カプトムシを買ってきました。

ために、受け手視点の判断の前に「(受け手)は(行い手)が何をしようと思っていたか知りました」という説明を行った。

道徳的判断の評定は、「とても悪い」「悪い」「少し悪い」「どちらともいえない」「少し良い」「良い」「とても良い」の7件法とした。

2つの物語および各4条件は、研究協力者ごとにランダムに実施した。物語の文脈が頻繁に変わると認知的な負荷が大きいと考えられたため、1つの物語の4条件を実施した後に、次の物語の4条件を実施した。また、視点の違いによる混乱を避けるため、尋ねる視点の順番は第三者、受け手、行い手の順に固定した。

実験全体の実施時間は約30分であった。

4. 分析方法

7件法で行った道徳的判断の評定は、1を「とても良い」、7を「とても悪い」として点数が高いほど悪さの程度が強くなるように、1～7点の道徳的判断得点に数値化した。ただし、2つの評定の間で決定できないと回答があった場合は、それらの評定に対応する平均値を算出した。

分析では、多要因で交互作用が想定されるた

め、Moran et al. (2011)と同様に分散分析を用いた。まずは、判断における意図と結果の考慮と、視点の違いの反映について調べるため、道徳的判断得点を従属変数として各物語の3視点ごとに、意図(PI/NI)×結果(PO/NO)×群(ASD/TD)の3要因分散分析を行った。次に、意図に相反する結果が生じる2条件の得点を群間比較するため、各物語の3視点ごとに条件(PI×NO条件/NI×PO条件)×群(ASD/TD)の2要因分散分析を行った。統計解析はSPSS v.22を使用した。

III. 結果

1. 判断における意図と結果の考慮と視点の反映

意図×結果×群の3要因分散分析における平均値とSDの全体傾向をFig.1に示した。

意図×結果×群の分散分析では、全課題のすべての視点において、意図の主効果と結果の主効果が有意だった。つまり、両群ともにポジティブな意図はネガティブな意図よりも良さの程度が強く、ポジティブな結果はネガティブな結果よりも良さの程度が強かった。さらに、カ

ブトムシ課題では、すべての視点において群の主効果が有意であり、ASD群がTD群よりも全体的に良さの程度が弱かった。ただし、全物語のすべての視点において交互作用が有意であったことから、群および意図、結果の組み合わせ

によって判断の表れ方に違いがあると考えられる。分散分析による主効果と交互作用、下位検定における単純交互作用および単純・単純主効果、単純主効果検定による*F*値一覧をTable 2に示した。以下に、各組合せの交互作用と下位検

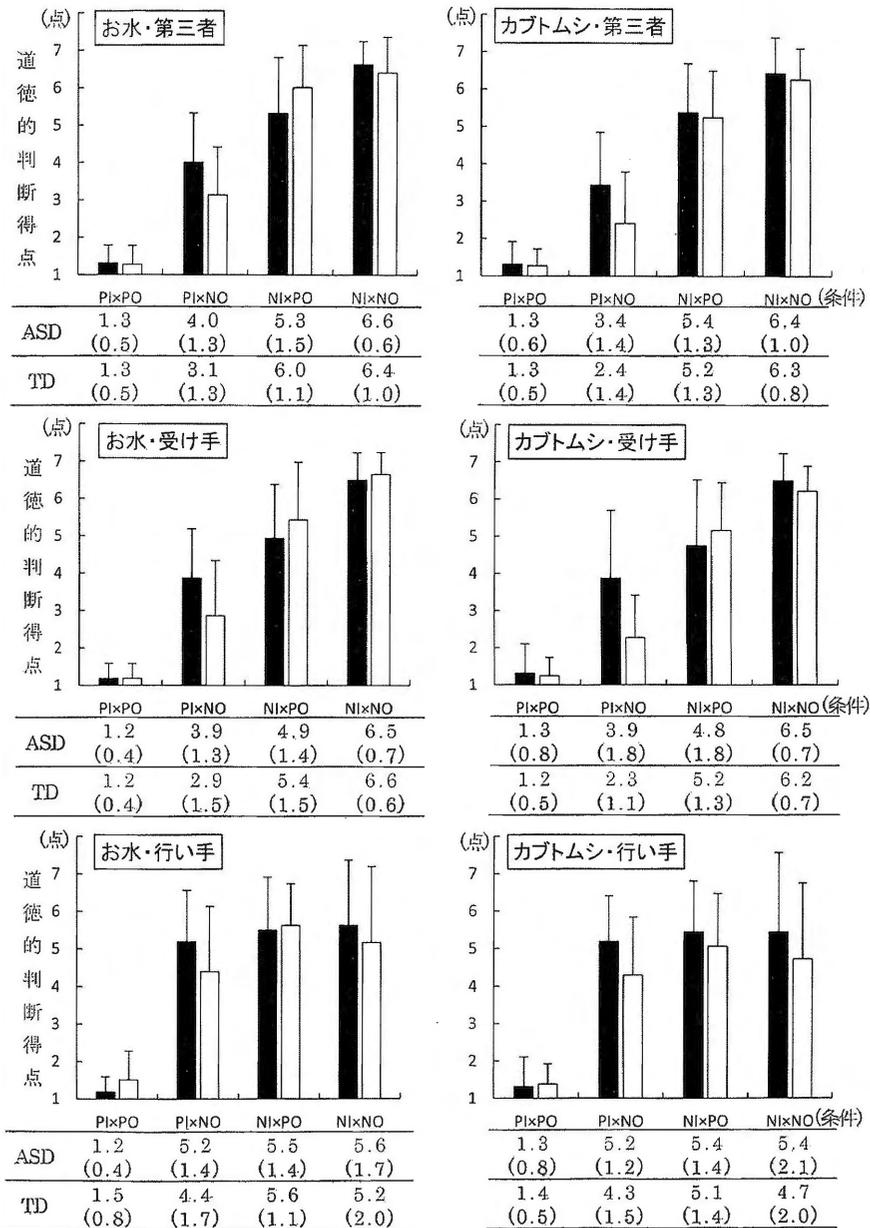


Fig.1 物語・視点・条件ごとの道徳的判断の得点

Table 2 意図×結果×群の分散分析のF値一覧

		主効果			交互作用				単純交互作用	
		意図	結果	群	意図×結果	意図×群	結果×群	意図×結果×群	PIの単純交互作用 結果×群の組み合わせ	ASDの単純交互作用 意図×結果の組み合わせ
お水	第三者	487.9**	154.2**	0.5	20.2**	4.3*	11.7**	0.0		
	受け手	320.5**	106.6**	0.4	10.3**	4.2*	3.9	1.8		
	行い手	75.7**	152.3**	0.7	92.9**	0.0	10.1**	0.5		
カブトムシ	第三者	442.3**	54.8**	4.8*	6.2*	1.2	2.0	4.1*	5.16*	7.3**
	受け手	404.4**	89.5**	5.0*	2.0	6.8*	10.9**	2.3		
	行い手	57.6**	71.7**	4.6*	104.4**	0.1	2.8	0.8		

		単純・単純主効果								
		意図の単純・単純主効果				結果の単純・単純主効果				群の単純・単純主効果
		PO×ASDの 組み合わせ	PO×TDの 組み合わせ	NO×ASDの 組み合わせ	NO×TDの 組み合わせ	PI×ASDの 組み合わせ	PI×TDの 組み合わせ	NI×ASDの 組み合わせ	NI×TDの 組み合わせ	PI×NOの 組み合わせ
カブトムシ	第三者	149.8**	331.3**	63.1**	242.3**	34.1**	22.5**	8.9**	19.2**	6.1*

		単純主効果											
		意図の単純主効果				結果の単純主効果				群の単純主効果			
		結果の水準		群の水準		意図の水準		群の水準		意図の水準		結果の水準	
		PO	NO	ASD	TD	PI	NI	ASD	TD	PI	NI	PO	NO
お水	第三者	412.3**	148.8**	143.4**	483.6**	120.8**	19.0**	89.9**	66.9**	4.9*	0.8	3.0	5.9*
	受け手	268.0**	198.3**	89.9**	329.8**	99.0**	45.7**			5.1*	1.3		
	行い手	339.4**	2.1			230.2**	0.5	86.3**	69.4**			1.5	3.3
カブトムシ	受け手			109.8**	427.2**			58.3**	31.4**	12.9*	0.1	0.5	15.5**
	行い手	271.1**	0.7			214.6**	0.3						

*数字はF値、全体の自由度はすべて51、要因の自由度はすべて1、**;p<.01, *;p<.05。単純交互作用と単純・単純主効果検定は有意差があった組み合わせのみ、単純主効果検定は実施した検定のF値のみを記載した。

定における結果を記述した。

(1) 第三者視点：お水課題では、意図と結果の交互作用、意図と群の交互作用、結果と群の交互作用が有意だった。単純主効果検定から、PI条件とNI条件における結果、PO条件とNO条件における意図、ASD群における意図と結果、TD群における意図と結果、PI条件における群、NO条件における群が有意だった。

カブトムシ課題では、意図と結果の交互作用、意図と結果と群の二次の交互作用が有意だった。単純交互作用検定から、PI条件における結果×群、ASD群における意図×結果が有意だった。そして、単純・単純主効果検定から、PI×NO条件における群、PI条件×ASD群とPI条件×TD群における結果、NI条件×ASD群とNI条件×TD群における結果、PO条件×ASD群とPO条件×TD群における意図、NO条件×ASD群とNO条件×TD群における意図が有意だった。

すなわち、群間差に関わる分析結果としては、第三者視点のお水課題において、PI条件ではASD群がTD群よりも良さの程度が弱く、NO

条件ではASD群がTD群よりも悪さの程度が強かった。そして、カブトムシ課題では、PI×NO条件において、ASD群がTD群よりも良さの程度が弱かった。

(2) 受け手視点：お水課題では、意図と結果の交互作用、意図と群の交互作用が有意だった。単純主効果検定から、PI条件における群、PI条件とNI条件における結果、PO条件とNO条件における意図、ASD群とTD群における意図が有意だった。

カブトムシ課題では、意図と群の交互作用、結果と群の交互作用が有意だった。単純主効果検定から、PI条件における群、NO条件における群、ASD群とTD群における意図、ASD群とTD群における結果が有意だった。

すなわち、群間差に関わる分析結果としては、全物語において、PI条件ではASD群がTD群よりも良さの程度が弱かった。そして、カブトムシ課題ではNO条件においてASD群がTD群よりも悪さの程度が強かった。

(3) 行い手視点：お水課題では、意図と結果

の交互作用、結果と群の交互作用が有意だった。単純主効果検定から、PI条件における結果、POにおける意図、ASD群とTD群における結果が有意だった。

カブトムシ課題では、意図と結果の交互作用が有意だった。単純主効果検定から、PI条件における結果、PO条件における意図が有意だった。

すなわち、行い手視点の特徴として、PI条件の場合はNO条件との組み合わせよりも、PO条件との組み合わせの方が良さの程度が強かった。また、PO条件の場合はNI条件との組み合わせよりも、PI条件との組み合わせの方が良さの程度が強かった。しかし、NI条件の場合のPO条件またはNO条件との組み合わせ、NO条件の場合のPI条件またはNI条件との組み合わせの間に有意な得点差はなかった。

2. 意図に相反する結果が生じる2条件 (PI×NO条件とNI×PO条件) における道徳的判断

意図に相反する結果が生じる2条件 (PI×NO条件とNI×PO条件)×群の分散分析による主効果と交互作用、下位検定のF値一覧をTable 3に示した。

各物語および視点における分散分析では、カブトムシ課題の行い手視点以外は、条件の主効果が有意だった。また、カブトムシ課題の第三者と受け手、行い手視点では群の主効果が有意であり、いずれもASD群がTD群よりも良さの程度を弱かった。一方、以下の物語の視点では交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。主効果および単純主効果に群間差がみられた視点と条件の平均値のグラフをFig.2に示した。

単純主効果検定の結果から、お水課題の第三者視点では、ASD群とTD群における条件、PI×NO条件における群が有意だった。お水課題の受け手視点では、TD群における条件、PI×NO条件における群が有意だった。カブトムシ課題の受け手視点では、TD群における条件、PI×NO条件における群が有意だった。

すなわち、いずれの条件差においても、PI×NO条件がNI×PO条件よりも良さの程度が強かった。また、PI×NO条件の群間差は、いずれもASD群がTD群よりも良さの程度が弱いことを示していた。

IV. 考察

1. ASD児童生徒とTD児童生徒の道徳的判断における共通点

(1) 判断における意図と結果の考慮：意図×結果×群の3要因分散分析において、両群ともポジティブな意図よりもネガティブな意図の方が悪く、ポジティブな結果よりもネガティブな結果の方が悪いと判断していた。課題の設定通りに善悪が判断されていたことから、本研究で用いた課題は、行い手の意図と行為の結果との一致性を変数とした道徳的判断を調べるものとして妥当であったと考えられる。また、ASD児童生徒がTD児童生徒と同様に、意図と結果の両方を考慮した道徳的判断が可能であったことは、ASD児者を対象とした先行研究 (Grant et al., 2005; Moran et al., 2011) の結果とも一致するものであった。

(2) 判断における視点の反映：判断する視点の違いを反映させた道徳的判断についても、ASD児童生徒とTD児童生徒との間に共通点がみられた。すなわち、行い手視点は他の視点と比べて、意図がネガティブである場合には、結果のいかんに関わらず悪いと判断すること、また、結果がネガティブな場合にも意図のいかんに関わらず悪いと判断していた。この結果は、ASD児童生徒がTD児童生徒と同様に、視点に応じて判断を変えており、その判断自体も一部共通していることを示している。

Costanzo et al. (1973) では、TD幼児児童が視点に応じて判断を変えるようになる年齢を検討した。その結果、年齢が高い児童ほど、行い手視点の場合に意図を重視していた。一方、本研究では、ASD児童生徒とTD児童生徒がともに、意図や結果どちらかを重視するのではなく、ネガティブな意図や結果が一つでもある場合に悪

Table 3 意図に相反する結果が生じる2条件 (PI×NO条件とNI×PO条件)×群の分散分析のF値一覧

	主効果		条件×群	単純主効果				
	条件	群		条件の単純主効果		群の単純主効果		
				群の水準		条件の水準		
				ASD	TD	PI×NO	NI×PO	
第三者	71.1**	0.1	9.8**	10.1**	110.8**	5.1*	3.4	
お水	受け手	26.1**	1.0	4.5*	3.2	43.2**	5.6*	1.2
	行い手	6.8*	1.1	2.4				
	第三者	55.1**	6.1*	2.0				
カブトムシ	受け手	35.9**	4.5*	10.3**	2.8	70.0**	15.1**	0.9
	行い手	2.3	5.6*	0.6				

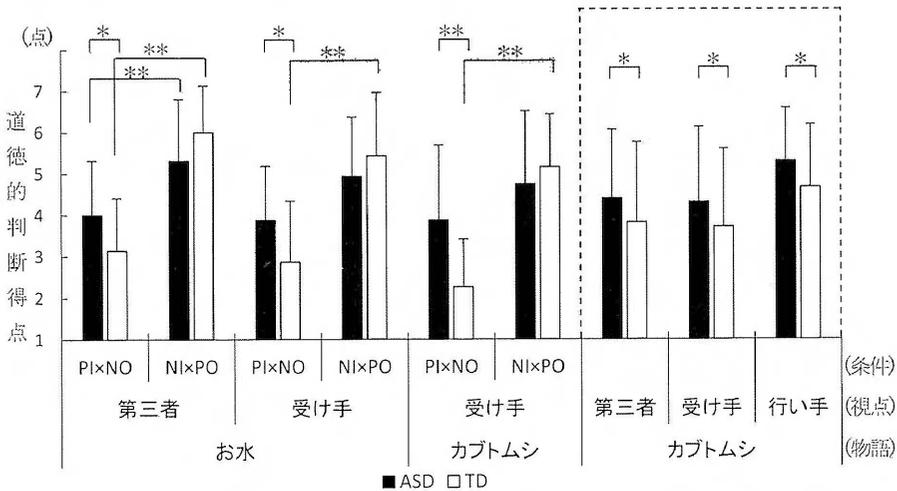
*数字はF値, 全体の自由度はすべて51, 要因の自由度はすべて1, **:p<.01, *:p<.05. 下位検定は, 実施した検定のF値のみを記載した.

いと判断していた。先行研究と本研究が異なる要因の一つとして、研究協力者の年齢が考えられる。Costanzo et al. (1973) では、小学校高学年までの幼児児童を対象にしたのに対し、本研究では小学校高学年から高校生までの児童生徒を対象にした。TD成人を対象とした先行研究では、判断が状況依存的であり、意図と結果以外にも、登場人物の人柄などの様々な要因を考慮することが示されている(渡辺, 1993)。本研

究の研究協力者は、これらの先行研究のちょうど中間に当たる年齢であり、Costanzo et al. (1973) よりも高い年齢群であったことで、成人に近い状況依存的な判断を行っていた可能性が考えられる。

2. ASD児童生徒とTD児童生徒の道徳的判断における相違点

(1) 意図と相反する結果が生じる条件におけるASD児童生徒の判断：意図に相反する結果



*グラフは各物語と条件の平均値, エラーバーはSD, **:p<.01, *:p<.05. 群の主効果および条件における群間差があった条件のみを表示した.

Fig. 2 意図に相反する結果が生じる2条件および各視点における群間差

が生じる2条件×群の分散分析では、全課題の受け手視点において、TD児童生徒はPI×NO条件とNI×PO条件とを明確に得点上区別していたのに対し、ASD児童生徒は2条件を得点上区別していなかった。そして、お水課題の第三者と受け手視点、およびカブトムシ課題の受け手視点において、PI×NO条件の場合に、ASD児童生徒がTD児童生徒よりも良さの程度を低く判断していた。

本研究のPI×NO条件は、先行研究のaccidental harm (Moran et al., 2011) に相当する。そのため、Moranなどの先行研究と同様に、ASD児童生徒がaccidental harmにおいて、ポジティブな意図よりもネガティブな結果を重視する判断を行うことが示された。

視点ごとにみると、全課題の受け手視点に共通して、ASD児童生徒がポジティブな意図よりネガティブな結果を重視する判断を行っていた。このことから、意図に相反する結果が生じる条件において両群の判断が異なるかどうかは、判断する視点によって左右される可能性が示唆された。しかし、意図に相反する結果が生じる条件を受け手視点から判断した場合に、文脈に関係なく、ASD児童生徒が必ず意図より結果を重視するのかについては今後の検討課題である。

本研究では道徳的判断の構成要素の中で、視点と意図の2つの要因の効果を検討した。これらを効果的に用いるためには、他者の心的状態の理解が必要だと考えられる。本研究の結果から、視点については、ASD児童生徒とTD児童生徒ともに、視点に応じて判断を変えていた。一方、意図については、意図に相反する結果が生じる条件において、ASD児童生徒は受け手視点を中心に、意図よりも結果を重視する判断をしていた。

Moran et al. (2011) では、高次なToMを評価する課題として道徳的判断課題を用い、一次の誤信念課題の成績との比較を行った。その結果、研究協力者のASD成人は、TD成人と同じ程度の反応時間と正確さで誤信念課題を解いた。一

方、道徳的判断課題のaccidental harm条件において、ASD成人はTD成人よりも良さの程度を低く判断していた。このことから、Moran et al. (2011) は、ASD成人がaccidental harmにおいて意図よりも結果を重視する判断を行ったことを、高次なToMの未発達が原因であると考察している。

しかし、本研究では、ASD児童生徒が視点に応じて判断を変えており、少なくとも他者の心的状態の一つである視点は表象していたと考えられる。他者の視点の表象が可能であったことを考慮すると、意図と相反する結果が生じる条件において、ASD児童生徒が意図よりも結果を重視する判断を行うことに対して、ToM以外の理由も想定される。すなわち、ASD児童生徒は意図の影響を理解していたが、何らかの理由で判断には反映しなかったという可能性である。ASD児童生徒が、実際に意図の影響を理解した上で判断に反映しなかったのかを明らかにするためには、意図と結果それぞれに対する判断の重みづけなどを今後検討していく必要があると考えられる。

(2) ASD児童生徒の社会的困難の支援に対する示唆：本研究から教育や臨床への示唆の一つとして、善意で行ったことがネガティブな結果に終わった状況において、ASD児童生徒は他者の善意があったことをあまり評価しない可能性が挙げられる。支援者とASD児童生徒の間で起こりうる齟齬の例としては、支援者のアドバイス通りに実行してうまくいかなかった場合に、その原因をアドバイスのせいにするといったことが挙げられる。この点を配慮すると、ASD児童生徒が困っている場面で、支援者は解決法を教えるのではなく、本人が適切な判断を自分で選択できるように援助することが重要だと考えられる。このような問題解決の枠組みとして、Greene (2008) は、支援者と当事者が懸案を共有し、ともに解決法を考える問題解決コラボレーション (Collaborative Problem Solving) を提案している。ASD児童生徒の認知特性に合わせて、本人の納得のいく判断ができるように

支援していくことが必要だと考えられる。

註

1) 課題実施時には、() に登場人物の名前が入る。

文献

- Baron-Cohen, S. (1995) *Mindblindness: An essay on autism and theory of mind*. MITpress, Boston, 長野 敬・長畑正道・今野義孝訳 (1997) 自閉症とマイド・ブラインドネス. 青土社.
- 別府哲 (2007) 自閉症における他者理解の機能連関と形成プロセスの特異性. 障害者問題研究, 34 (4), 259-266.
- Buon, M., Dupoux, E., Jacob, P., Chaste, P., Leboyer, M., & Zalla, T. (2013) The role of causal and intentional judgments in moral reasoning in individuals with high functioning autism. *Journal of autism and developmental disorders*, 43 (2), 458-470.
- Costanzo, P. R., Coie, J. D., Grumet, J. F., & Farnill, D. (1973) A reexamination of the effects of intent and consequence on children's moral judgments. *Child Development*, 44 (1), 154-161.
- Fadda, R., Parisi, M., Ferretti, L., Saba, G., Foscoliano, M., Salvago, A., & Doneddu, G. (2016) Exploring the role of Theory of Mind in moral judgment: the case of children with autism spectrum disorder. *Frontiers in psychology*, 7, 1-8.
- Frith, U. (2004) Emanuel Miller lecture: Confusions and controversies about Asperger syndrome. *Journal of child psychology and psychiatry*, 45 (4), 672-686.
- Grant, C. M., Boucher, J., Riggs, K. J., & Grayson, A. (2005) Moral understanding in children with autism. *Autism*, 9 (3), 317-331.
- Greene, R. W. (2008) *Lost at school*. Scribner, New York, 井上祐紀・竹村文訳 (2013) 子どもの問題行動を解決する3つのステップ. 日本評論社.
- Happé, F. G. (1994) An advanced test of theory of mind: Understanding of story characters' thoughts and feelings by able autistic, mentally handicapped, and normal children and adults. *Journal of autism and Developmental disorders*, 24 (2), 129-154.
- Moran, J. M., Young, L. L., Saxe, R., Lee, S. M., O'Young, D., Mavros, P. L., & Gabrieli, J. D. (2011). Impaired theory of mind for moral judgment in high-functioning autism. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108 (7), 2688-2692.
- Senju, A., Southgate, V., White, S., & Frith, U. (2009) Mindblind eyes: an absence of spontaneous theory of mind in Asperger syndrome. *Science*, 325 (5942), 883-885.
- 鈴木亜由美 (2013) 幼児の意図理解と道徳判断における意図情報の利用. 心理学評論, 56 (4), 474-488.
- 渡辺弥生 (1993) 道徳判断における動機情報と結果情報の統合過程に関する研究. 静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学篇, 43, 213-225.
- 2017.8.28 受稿、2017.11.5 受理 ——

Moral Judgment under Incongruence between Actor's Intention and Outcome of Action in Children with Autism Spectrum Disorder: The Effect of Point of View on Judgment

Eriko OKAMURA*, Shinji OKAZAKI and Hitoshi DAIROKU**

In this study, 16 children with autism spectrum disorder (ASD) and 37 typically developing (TD) children aged between 8 to 18 years were required moral judgments from the points of view on third person, recipient of action, and actor. Stories using as material included two variables, i.e., actor's intention and outcome of action with positive or negative value. Results indicated that children with ASD and TD children could consider both intention and outcome in each material. Additionally, judgments according to the points of view changed in both groups. However, children with ASD put more weight on negative outcome than on positive intention when actor's intention and negative outcome were incongruent, especially from the points of view of recipient of action.

Key words: autism spectrum disorder, moral judgment, actor's intention, outcome of action, points of view

* Moriya Child Ryouiku Classroom

** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba